

○作品タイトル『ひゅん』

○著者名 三倉くら

○あらすじ

父親に愛想をつかさされ、日本人でありながら台湾に残った志遠は台北の下町で小さな酒場を営んでいる。常連の文烈は火曜だけ胸の銀ロケットを外す謎の男だった。志遠は文烈の過去の話を知る。彼は狙撃手で、混血の若者・青嵐とかつての親友を殺すことになる。しかし青嵐にも文烈にも、秘密があった。

○本編文字数 4919 文字

<本文>

台湾解放後、俺は日本に帰らずに台北に残った。引き上げの日にも俺は仲間たちといて、親父は俺を探そうともしなかった。俺は藍志遠と名乗って素性は隠した。本土から人民が台北へ次から次へと逃げてきた時代だ。俺のことを日本人なんて疑う奴は誰一人いなかった。

そんな俺が夜市の屋台から始めて小さいながらも大稲埕に呑み屋を構えることができたのは、単に幸運だったからに過ぎない。四十過ぎたばかりの俺が、六十に見えるほどに老いたが。

男たちの中には眠るために酒を飲む者もいる。文烈もその一人だった。眼光の鋭い男だった。文烈は毎日休みもせずに店に通い続けた。奴は深夜になるとやってきて、紹興酒を黙ってちびちびと飲み、朝方に去っていった。

ある火曜日の早朝だった。客は文烈以外は全員帰り、俺も退屈だった。そこで思い切って文烈に話しかけてみることにした。

「お客さん。あんた、長い間軍隊にいたね」

文烈は怪訝そうに顔をあげた。

「しかもただの兵隊じゃない。狙撃手だったろう？」

さすがの彼も、目を丸くして驚いた。

「どうしてわかった？」

「その爪だよ。綺麗にカットされてある。狙撃手ってのは、引き金のちょっとした違和感、それだけで標的を外すらしいな」

彼は自身の爪をそっと見た。

「店主さんも軍隊出身かい？」

「いいや。だがこれでも客を見る目には自信があつてね……もう一つ、あんたの秘密を暴いてやろうか？」

文烈は「どうぞ」と笑った。

「あんたは毎日、店に来てくれるが、火曜日だけ違っている点がある。それは胸ポケットにロケットを入れていないことだ。火曜日以外、あんたの左胸のポケットは常に膨らんでいる。それがロケットだと知ったのは、あんたが何度か胸からロケットを取り出し、中の写真を見ていたからだ。だが火曜日には、なぜかそれが無い。どうだ凶星だろう？」

文烈は「お見事」と首を振り、自分の名前を名乗った。

「店主さん、あんたの名前は？」

「志遠だ」

「志遠。君は優秀だな」

「そうでもないさ。もしそうなら、こんな場末で店を開いてないさ」

文烈は「なるほど」と微笑んだ後、こう続けた。

「では場末の店の志遠にちょっとした謎かけをしようと思うんだがね」

俺はカウンターから乗り出した。

「面白そうだ。ではボトルを一本賭けようか。俺が謎を解けなかったらボトル一本分、飲み放題。謎が解けたら、そうさな、うちで一番高いボトルを一本あんたに買ってもらう」

「OK。では、さっき君が話していた『なぜ火曜日だけ銀のロケットを胸のロケットに入れられないか』っていう話だ。その謎を解いてくれよ」

俺は頷いた。それから文烈は、話し始めた。

狙撃手は単独行動はしない。複数で作戦に当たる。ある時、私は六人の隊の隊長だった。私は相当なキャリアを積んでいたから、私に逆らえる者は誰もいなかった。一人、新入りの奴がいてね。青嵐、っていう名前だ。混血児で青い目をしていた。

狙撃専門の隊は山や森に籠ることが多い。時が来るまでひたすらターゲット

トを待つ。若い男たちばかりだから猥談なんかも多くてね。私は横から楽しんでいたが青嵐はいつも離れたところにいた。気晴らしにおしゃべりする隊員を侮蔑していた。

そういう態度に気分を害する者もいた。「青嵐。気楽になれ」、私は諭したが青嵐は「はあ」と愛想のない返事をするだけだった。青嵐の狙撃の腕は一流だった。その才能に対する嫉妬もあったのだろう。隊の中で乱暴者の大男がいて、ある夜、私の目を盗んで青嵐を抑え込んだ。

「てめえ、その態度はなんだ。お前は女か？」

そう言って青嵐のベルトを外そうとした。そいつとしてはちょっとした悪戯のつもりだった。だが事が起こったのは一瞬だった。大男の指が宙を舞った。ナイフで青嵐が切り落としたんだ。

さあ、どうしたものか。普通なら青嵐を軍法会議送りだ。だが私は青嵐を庇った。大男がやったことも十分に規律違反だったからだ。それで医療班の到着まで全員を待機させて、残った隊員で作戦を実行した。標的は裏で大陸側に内通している政治家だった。そいつの左胸を撃ち抜いたのは、青嵐のライフルだった。

台北の刑事はレボルバーを持ち歩くだらう？ あれは発砲するとき、ひどく派手な音を立てる。威嚇の意味もあるだろうね。だが私たちのライフルは違う。ひゅん、さ。まるで一瞬の風の音だ。

ひゅん。

その音だけで人は死ぬ。

さて一年が経って私はまた任務を受けた。それが特殊な事案だった。麻薬を調達している村があった。その村の有力者を狙撃せよ、という指令だった。その名は『狼』。裏世界の隠れた大物だった。

どうして私とその役に選ばれたのか。話は二十年以上前に遡る。私は上海マフィアにスパイとして潜入していた。そのときのマフィアのボスの側近が、若い頃の『狼』だった。私と『狼』は気が合ってたね。すでに頭角を現していた『狼』の世話役もやらされていた。だから『狼』の生活の癖をよく知っていた。

しかし忍び込むのは限られた人数だ。私ともう一人。それが青嵐だった。一年ぶりの再会だった。

『狼』のアジトは深い山奥にあった。私たち二人は何日も山に潜み『狼』が現れるのを待った。突然の豪雨、沼のヒル、毒蛇、尽きていく食料と水。

ついに『狼』がやってくる日がわかり、私たちは限界までアジトに近づき草むらの中でライフルを構えていた。

「なあ、青嵐。私はこの作戦を最後に引退しようと思う。だからこの限界の状況でも耐えられる。だがお前はどのようにして逃げ出そうとしない？ 山から降りたらお前は自由だぞ」

青嵐は曇り空を見上げた。そして「あなたには話してよさそうだ」と財布から一枚の古ぼけた写真を取り出した。青い目をした外国の女だった。

「『狼』には恋人がいました。それがその写真の女。僕の母です。ある日、母は僕を産んだ。しかし『狼』は勝手に自分の仔を産んだ母を疎ましく感じたのか、母を虐げた。ついに母は『狼』に殺された。赤ん坊だった僕も殺される場所だったが危険を感じた母が事前に手配したらしい。僕は乳母と共に逃げました。それで僕はその写真だけを手に持ち、孤児院で育ったんです」

「……母親が、なぜ『狼』の恋人だと知ったんだ？」

「孤児院には様々な人間が入り出します。一人の業者が『狼』の下っ端をしていた老人だった。それで教えてくれたんです。その老人の話は嘘じゃなかった。母親は『狼』に殺されたんだ」

「だが奴はお前の父親だろう？ なぜ殺す？」

「そんなことは関係ない。僕の母は『狼』に喰い殺されたんだ！」

激しい憎悪が青い目のなかで燃えていた。狐狼そのものだった。

「それで隊長に聞きたい。あんたは『狼』のところで内偵をしていたんでしょう？ 俺の母を知っていますか？」

「……写真を見て驚いたよ。一年前にお前と会った時から胸騒ぎはしていた。お前のその青い目はアンナにそっくりくだ」

「アンナ……僕の母の名だ」

「そう。私は『狼』の世話役でもあったからな。アンナとも幾度か話したことがある。アンナはいつも悲しそうに俯いていた。そして――」

そのときだった。ジープの音が近づいてきた。私たちはごくりと唾を呑み込みライフルスコープを覗き込んだ。隣で青嵐が呟いた。

「僕が殺ります」

黒い髭を蓄えたどう猛な目の男がジープから降りた。『狼』だった。

一瞬だった。ひゅん、と風の音がした。スコープの向こうで『狼』が左胸を撃たれて、倒れこんだ。

青嵐が隣で震えていた。しかし向こうは大騒ぎだ。部下たちが四方八方へ

と発砲していた。

「いくぞ!」、私は青嵐を促すと、事前に待ち合わせていた沼地まで逃げていった。茫然自失の青嵐を必死で鼓舞しながら、私たちは援軍と何とか落ち合い逃亡に成功した。

その夜のことだった。青嵐が私のところにやってきた。「よくやったな」、私は青嵐の肩を叩いた。

「……僕が殺る、といったはずだ。なぜ撃ったんです」

「お前が一発目を外したからさ」

「二発目はすぐに撃てた」

「撃てただろうが、また外したよ。お前の指は震えていた」

青嵐は項垂れた。

「僕は……母のために、復讐をしたかったのに」

満月の夜だった。私たちは二人で月を見ていた。それから私は左胸から銀のロケットを取り出した。

「隊長はそのロケットをいつも左胸に入れていましたね。でも火曜日だけはズボンのポケットに仕舞っていた。なぜですか？」

「お守り代わりだよ」

「お守り？」

「そうさ。これは純銀でできているんだ。よく映画であるだろう？ 銃撃されても胸に入れていた純銀製の懐中時計が心臓を守ってくれた、とかさ」

「だったら常に左胸のポケットに入れておけばいいじゃないですか。なぜ火曜日には入れておかないんですか？」

「……火曜日に女が死んだんだ」

「女？ 愛した女ですか？」

「そうだ。私たちの愛は許されない愛だった。女は私の親友の恋人だった。そいつはどうしようもない奴でな。私に女の世話をさせたんだよ。そしてあろうことか私は彼女と愛し合ってしまった。しかしそんなことがろくでなしの親友に知れてみる。私は八つ裂きにされる。結局私は逃げ出した。それから数年後のことだ。彼女が殺された、と聞いたのは。赤ん坊を出産したらしいが、どう考えても親友の子じゃなかったらしい。つまり彼女は私の子を産んだんだ。彼女は……火曜日に殺されたそうさ」

青嵐は黙ったまま私を見つめていた。私はロケットを開けて写真を見せた。青い目をした女だった。青嵐は写真を凝視した。

それから私はロケットを胸ポケットにしまい込んだ。

「私は今日で退役する。もしお前の指が震えなくなったのなら会いに来いよ。待っているぞ」

そうして私は青嵐と別れた。

俺は黙って紹興酒のボトルを持ってくとグラス二つに注いだ。文烈は笑った。

「どういうことだい？ この賭けはどっちの勝ちなのかな？」

「そこまで話せば誰でもわかるさ。狼の愛人のアンナこそがあんたが愛した女だ。つまり青嵐はお前の息子だったんだな。そしてあんたが火曜日だけ胸ポケットからロケットを出しているのは、アンナへの哀悼のためだ……だが俺には理解できないことがある。だから引き分け、ってことさ。これは店で一番高い酒だ。ボトル一瓶というわけにはいかないが、俺のおごりだよ。付き合ってくれ」

俺はグラスを一口で飲み干すと、文烈を促した。文烈はにやりと笑い飲み干した。俺はもう一杯酒を注ぎ込んだ。

「なあ、文烈。あんた、なんで今でも火曜日にロケットを出してる？ どうしてアンナとのことを青嵐に教えたんだ？ だってそんなことをしたら——」

青嵐は『狼』を恨んでいた。そして実の父親である文烈のことも恨んでいるだろう。母親を見捨てたからだ。しかも『狼』への復讐は果たせなかった。あろうことか父親がそれを阻害したのだ。だが青嵐は知っている。火曜日には文烈の胸ポケットに銀のロケットは入っていない。

しかし俺は口をつぐんだ。文烈の笑顔が寂しそうだったからだ。

文烈は黙ってズボンのポケットから銀のロケットを取り出した。そして俺に中を見せてくれた。俺は驚いた。そこには青い目をした女の写真が入っていた。彼が愛したアンナだ。しかしロケットには写真が二枚入るようになっていて、もう一枚には同じく青い目をした若者の写真があった——青嵐に違いなかった。

「あんた……いつから青嵐が自分の息子だと気がついていったんだ？」

俺はそう文烈に聞いたが彼はそれに答えず、グラスの中の酒を一気に飲み干した。

「なあ志遠。今日は良い酒をありがとう。明日また来るよ」

文烈はゆっくりと立ち上がり入り口まで歩いていった。そして俺の方を振

り向いて、こう言った。

「どうして私が今でも火曜日に胸ポケットからロケットを取り出しているか……なあ、そのあたりが狙撃手なのかもしれんぜ。普通の人間は守るために撃つ。だが俺たちは奪うために撃つ。そして奪う人間は、いつかは奪われる。結局は誰もが人生のツケを払わなければいけない時が来るのさ」

文烈はにっこり笑うと、店の外へと出ていった。

それからすぐのことだった。

ひゅん。

悲しい風の音が俺の耳に届いた。

それで俺は日本に戻ることにした。